

2020年度 大学院奨励研究員研究報告書

2021年 3月 29日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	穆彦姣	印
-----	-----	---

指導教員

所属・職名	文学部 教授	
氏 名	大橋毅彦	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	初期江戸川乱歩作品の変遷軌跡に関する研究 ——深層心理への追求と前近代的要素の展開を中心に
採用期間	2020年 4月 1日 ～ 2021年 3月 31日

研究科委員長・研究科長印	事務局印

提出先： 所属研究科事務室

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

(1) 学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	穆彦姣	論文題目	江戸川乱歩『人間椅子』論——椅子職人「私」における〈肉体〉と〈精神〉——		
	雑誌名	「『新青年』趣味」		巻号	発行年月	掲載頁
				20	2020年5月	207～220

雑誌論文	著者名	穆彦姣	論文題目	江戸川乱歩『心理試験』論——「屏風」が示す問題系——		
	雑誌名	「人文論究」		巻号	発行年月	掲載頁
				Vol. 70 No. 3	2020年12月	1～18

図書	著者名	穆彦姣	論文題目	担当箇所：渡辺温「降誕祭」（解説）		
	書名	『『新青年』名作コレクション』、筑摩書房		発行年月	頁	
				2021年4月	総頁：605 担当箇所：190	

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

(2) 学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	『新青年』研究会 6月例会	開催地	ZOOMオンライン会議
題目	江戸川乱歩『湖畔亭事件』論 ——近世文学との繋がり——	発表年月日	2020年6月27日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（3000字程度）

2020年11月末に「初期江戸川乱歩作品の変遷軌跡に関する研究——深層心理への追求と前近代的要素の展開を中心に」と題した博士論文を提出し、2021年2月に行われた公開発表会及び口頭試問を経て無事承認された。

博士論文の構成は以下の通りである。

序章

第一部 心理学理論から深層心理へ

第一章 『心理試験』論——「屏風」が示す問題系——

第二章 『屋根裏の散歩者』論——犯罪嗜好者郷田の「本性」——

第三章 『パノラマ島綺譚』論——変わりゆく〈ユートピア〉——

第二部 「東洋的」作品世界の創出

第四章 『D坂の殺人事件』論——雑誌「新青年」における「国民性」への要請——

第五章 『人間椅子』論——椅子職人「私」における〈肉体〉と〈精神〉——

第六章 『湖畔亭事件』論——「片山里」の風景と人情——

第三部 休筆後の展開

第七章 『陰獣』論——理智と本能の狭間に——

第八章 『押絵と旅する男』論——前近代的風景への郷愁——

終章

なお、序章・第一章・第六章・終章は2020年度に執筆したものであり、ほかの章に関しては、公表済みの論文に対して加筆修正を行った。

以下、博士論文の要約である。

本論は主に登場人物の深層心理への追求と作中における前近代的要素の展開という二つの視点に基づき、専業作家の道を歩みはじめてから通俗長篇の量産に向かうまでに発表された江戸川乱歩の作品群を取り上げ、初期乱歩作品に表れた諸傾向及びその変遷の過程について検証を行った。

まず第一部では、探偵小説家を志しデビューを果たした乱歩が、探偵の方法論としてフロイトやミュンスターベルヒの心理学理論に注目し、作品内での応用を果たすが、創作を重ねるうちにその関心が徐々に人間の深層心理を描くことに移っていく過程を明らかにするために、『心理試験』、『屋根裏の散歩者』と『パノラマ島綺譚』を取り上げた。三篇とも主に異常性を持つ犯罪者の視点のもとで物語が展開されているが、異常者としての一面だけでなく、作中に描かれるそれぞれの犯行前後における具体的な心理活動や行動、他者との関わり方などを中心に分析を行うことによって、その異常性から逸脱するような部分が作品の展開に齎した影響を論証し、異常な犯罪者における人間としてのリアリティを追求したという乱歩の創作スタンスを見出した。

次いで第二部では、『D坂の殺人事件』、『人間椅子』と『湖畔亭事件』を取り上げた。まず、『D坂の殺人事件』掲載前後における雑誌「新青年」の編集方針を明らかにした上で、同作は探偵の人物造形と密室トリックの構成において、編集側の期待に合致した「国民性」の持つ作品であったことを指摘した。また、日本と西洋における肉体認識及び肉体と精神の関係性に関する認識の相違が露呈した『人間椅子』、前近代の面影を残す地方療養地とそこで働く田舎芸妓の運命を描いた『湖畔亭事件』に関する分析を通して、それぞれのテクストに登場する前近代的要素によって、日本固有の文化や風俗、価値観などが作中において表象されていることを論証し、欧米探偵小説に対して乱歩作品が持つ独自性を明らかにした。

昭和二年三月、新聞連載『一寸法師』の出来に不満を持った乱歩は休筆を宣言し、十四ヵ月の放浪生活を送った後に作家復帰を果たしたが、本論の第三部においては、休筆後に発表された作品として『陰獣』と『押絵と旅する男』を取り上げ、それぞれの主題を明示した上で、休筆前後の創作に見られる一貫性と進展について検証を行った。まず、「道徳的に人一倍敏感」な探偵役が、好意を寄せた女性に纏わる一連の事件に関わるうちに、自らの心の奥底に潜む「陰獣」たる一面を自覚していく物語として『陰獣』を捉え直し、本論の第一部に論じられた異常な犯罪者の深層心理に対する掘り下げが、遂に探偵側にまで敷衍していったことを論証した。また、作品の背景にある押絵や歌舞伎などの伝統工芸や芸能が物語の展開に齎した影響と、日清戦争や関東大震災などの時代背景が持つ意味について分析した上で、第二部に論じられた日本固有の文化や風俗、価値観を反映した作品の集大成として『押絵と旅する男』を位置づけし、乱歩における「浅草趣味」の本質についても論及した。

以上のように、本論は三部構成によって、専業作家になった大正十四年から、休筆を経て昭和四年の前半までに発表された八篇の作品に関する分析を通して、それぞれの作品の再評価を図るとともに、今日において想定される探偵小説の枠組みに留まらない初期乱歩作品の主題を解き明かし、この時期における乱歩の創作理念を明らかにした。

今後の課題としては、まず、周知のように乱歩は『押絵と旅する男』の発表のわずか二ヶ月後に講談社からの執筆依頼によって『蜘蛛男』の連載をはじめ、以降通俗長篇を量産するようになるが、『蜘蛛男』の執筆について「心にもないことを書かされたのではない、通俗という条件はあったけれど、内容は私の思うままに書いてよかった」（「初めての講談社もの」『探偵小説四十年』桃源社 昭和三十六年七月）と後年回想しているように、通俗長篇は必ずしも読者迎合の産物のみではなからう。本論で提示した創作の方向性が通俗長篇において見せる展開については、まだ検討の余地が残されていると思われる。

また、本論における考察の中心である大正十四年から昭和四年という時期は、探偵小説の創作が盛んに行われ、当該ジャンルに関わる作家を輩出した時期でもある。同時期に発表された作品において、登場人物の深層心理または前近代的世界観に対する関心はどれほど窺えるものなのか。同時期の探偵小説における創作傾向とその中にある乱歩の位置づけをさらに正確に捉えるために、その辺の考察も必要になると考えられる。

学会参加などに関しては、春学期ほとんどの大会がパンデミックの影響を受けて延期や中止になってしまったが、昨年度より参加している「『新青年』研究会」は5月からオンライン会議に切り替え、以降ほぼ毎月例会を行っていたため、外部と意見交換をする機会を得た。6月に例会で『湖畔亭事件』に関する報告を行い、そこで頂いたご意見を元に改稿したものが博士論文の第六章に当たる。秋学期以降は、阪神近代文学学会などのオンライン大会に参加し、議論に加わった。

その他、『新青年』研究会のメンバーとして、アンソロジー企画『『新青年』名作コレクション』に参加し、渡辺温の掲載作品の選定及び作品解説の執筆を担当した。同書は2021年4月に刊行予定である。

最後に、2020年はコロナ禍でかなりイレギュラーな年になってしまったが、このようなイレギュラーな年に博士論文を提出できたのは、奨励資金の獲得により経済的・精神的余裕が生まれたことが非常に大きく、奨励研究員制度には心より感謝を申し上げたい。

以上